



# だより



ハンサム金次郎シリーズ②  
学校デビュー! 負薪読書金次郎像



尊親家族と興復社のリーダーたち(明治41年3月 釧路にて)

## 二宮尊親の報徳開拓で開花した 北海道・豊頃

● 豊頃町

二宮尊徳の孫尊親は、福島県の相馬で報徳の指導をしてきた尊徳の高弟富田高慶から興復社を引き継ぎ、明治30年、自立と発展を目指す農民を率いて、北海道十勝平野の開拓に挑戦しました。入念な事前調査を経て、丘の麓に小河川の流れる理想の原野・豊頃牛首別に入植。極寒の地で共に生活し、悪戦苦闘する開拓者を叱咤激励し、勤労、分度、推譲の報徳仕法の互助精神を貫いて成功に導きました。鋤入れから118年後の平成27年10月10日、この豊頃で、全国の報徳によるまちづくりに賛同する14市町の代表や報徳関係者が一堂に会し、「第21回報徳サミット」が開催されました。今は恵み豊かな田園と海原の広がる、農漁業立町の豊頃です。

# 第21回 全国報徳サミット 豊頃町大会

豊頃町は北海道十勝地方の東南端、農業と漁業が中心の人口約3,500人の町です。今回は北海道初の大会ということで、道内からの参加者も多く、町役場隣接の「える夢館」に、報徳ゆかりの14の市町村の長や代表、関係者500名が一堂に会しました。

大会は「二宮獅子舞神楽」の披露に始まり、二宮尊徳の教えを反映したまちづくり・ひとづくりについての報告、熱心な討論や情報交換が行われ、最後に二宮尊親の豊頃開拓についての貴重な講演がありました。また会場には各市町の紹介や小中学生の報徳の教えを大書した書道などの展示コーナーもあり、屋外の特設テントでは、町の特産農水産物の試食販売会も催され、大きな盛り上がりが見られました。(写真右)



## ~~~~~ 二宮尊親と豊頃開拓のあゆみ ~~~~~



二宮尊親

**尊親の決断** 明治維新後、尊親は相馬藩の仕法を引き継ぎ、民間結社「興復社」による荒廃地の開拓事業を進めてきました。しかし明治政府の全国一律の租税体系のなかでは、為政者の税収に分度を課し、その余剰

を社会への投資にまわし、豊かな生活を実現していくという報徳仕法の原理は受け入れられませんでした。その上政府のデフレ政策で農家の自立も危ぶまれたため、尊親は「北海道国有未開地処分法」という、土地の無償払下げ制度による開拓奨励策に着目、北の大地に新たな報徳の村を創出することに望みをつなぎました。明治29年(1896)のことでした。

尊親は早速船で十勝平野開発の拠点大津港(豊頃)に上陸。7月29日、アイヌ青年の案内で牛首別に至りました。丸山に登ると、三方を丘に囲まれた理想の平地が眼前に広がっていました。

尊親は開拓を興復社事業として、国から403万坪の土地の貸下げを受け、入植者を募集しました。当時北海道開発は、資本家が広大な土地を取得

し、開拓者はその農場の小作農として雇用され、自立困難な状態にありました。尊親の計画は、開墾地は一戸あたり五町歩(5ha)、すべて開拓者自身が所有し、独立自営の地域共同体・報徳の村を創出すること。移民の資格はまず身体丈夫、若く品行方正で家族持ち、身元引受人があり、15円以上の携帯金と渡航旅費自弁可能者とししました。

その上で興復社は移住者と次のような契約を結びます。1. 移住者には土地5町歩(ha)を支給。2. 耕地4町歩の開墾と報徳金の完納をもって土地の所有権を譲渡。3. 開拓に必要な物資(農具、食料、種子など)の支援と、反あたり3円の開墾費の支給。4. 報徳の教えの遵守、などでした。

**入植開始** 明治40年、先住の移住者6戸を含め、わずか19戸からのスタートでしたが、希望者は年々増加。当初は、2間(3.6m)と3間(5.4m)の粗末な掘っ立て小屋で、マイナス10度を超える厳冬期をしのぎ、機械も牛馬もなく、鍬や鎌、斧、鋸だけの人力作業で大木を伐採、叢根を除去し、整地をし、排水溝や道路整



移民給与金品下付台帳





備もするという苦闘の日々でした。

尊親は十勝川沿岸の茂岩に住居を構えて家族と住み、外界との連絡や物資の補給にあたりながら、毎日乗馬で8キロ離れた興復社事務所に通い、開墾地を見廻り、入植者を指導、激励します。そして、毎月20日(尊徳の命日)の午後を例会日として、報徳講話、情報交換、個々の相談に当たりながら博打や無駄な会食、虚礼などを戒め、一方で、火災水難病氣や冠婚葬祭などでは、相互扶助の連帯でのぞむよう指導しました。そして毎年投票で篤行者を3～5人選んで表彰し、賞金と褒美(報徳訓の軸や鎌などの農具)を与えています。



興復社事務所

4年後の明治34年には入植者は200戸近くになり、村らしい姿になってきました。翌年住民の発議により、勤労、分度、推譲を基本にした規約を定め、牛首別報徳社を設立。同時に精神生活の共通のよりどころとして報徳二宮神社の造営を計画、酒宴費用を節約して毎年10銭の積み立てをはじめます。そして15年後の大正9年に、尊親が初めて牛首別を眺望した物見の岡・丸山に社殿を造立、国見をした7月29日を、探見記念日と決めました。

入植10年後の明治40年、興復社は840町歩(ha)の開墾と160戸の農家の自立を達成、道路6951間(3.3km余)、橋梁61か所を整備しました。一定の成果を収めた尊親は、豊頃を引き上げ相馬に戻り、尊徳時代から引き継いできた報徳資料の整理に着手します。それでも年2回は豊頃を訪れ、指導を続けます。3年後の1910(明治43)年、

尊親は開拓の実績により、明治政府から「選奨」や「御代覧」の榮を得ました。「選奨」は特別な選抜による報奨、「御代覧」は北海道来訪の皇太子の代理として、関係部局の者が農場を視察したことです。

**逃亡者と自衛自活の達成** しかし、こうした榮譽の陰で、尊親を最も悩ませたのは、少なからずの逃亡者が出ていたことで、不面目の極みでした。それでも豊頃への移住者の定着率は、他よりかなり高かったと言われています。尊親はその後自らの理想と方針に忠実であり続けます。

明治44年に牛首別報徳会が馬匹牧場の経営を計画、土地の払下げを道庁に出願するにあたり、出資者を資金にゆとりのある有志でまとめたという意見がありましたが、尊親はあくまでも移民全員参加の共同共有体制の堅持を主張、自営自活の農家の共同体の原則を守らせました。

**現在の豊頃町** 報徳共助の農村はその後新しい時代の農業に即応して発展を続け、今では十勝地域の戸あたり平均耕作面積は38ha。大規模な機械の導入により、一筆の圃場面積は数ヘクタール規模にもなるそうです。尊親の当初の計画5町歩(約5ha)の7～8倍にもなる大農場が連なり、日本離れた田園景観を呈しています。

特産は、馬鈴薯と甜菜、大豆や小豆などの豆類、それに小麦、大根、牛乳と牛肉です。加工用の馬鈴薯はポテトチップスの、甜菜は砂糖の原料となります。小豆は羊羹の原料ですが、著名な老舗メーカーでは十勝産を主としているようです。大根は十勝大根の銘柄で主に関西方面に出荷され、牛乳は「四つ葉」のブランドで販売されています。



尊親物見の丸山。頂上に報徳二宮神社

# 報徳の広場

## 第33回企画展 報徳の「かたち」

平成27年度の企画展は、〈報徳の「かたち」〉と題して、平成27年11月20日から12月20日まで、当博物館地下展示場で開かれました。近代社会になってからも報徳が長く伝えられてくる過程で、その教えや尊徳の人物像などが、視覚に訴える形で、数多く造形されてきました。全国の学校の校庭でなじまれた負薪読書の金次郎像などはそのよい例ですが、今回は、室内で机上や棚に置かれた金次郎像を始め、床の間を飾った格調高い掛軸や団扇の絵柄、あるいは商店が宣伝用に作った引き札など、私たちのより身近にあって親しまれた、さまざまな報徳の「かたち」66点を展示しました。次号の博物館だよりでは、その代表的なものを選挙してご紹介いたします。



わらじ作りをしながら月明りで  
読書する金次郎。(部分)  
尾形月山画

## 「ハンサム金次郎」シリーズについて

日本人におなじみのアイドル金次郎像は多種多様です。貧しさにめげず健気に働き学ぶ模範的な少年金次郎は、明治中期以降絵画や彫像などに数多くとり上げられ、理想化され、全国津々浦々で多くの人々に親しまれてきました。報徳博物館だよりでは「ハンサム金次郎」と題し、造立の由来や普及、地域、社会との関わりなど、それぞれの金次郎像文化誌の一端を紹介します。

### ハンサム金次郎シリーズ ① ブラジルに渡った報徳少年使節(前号掲載)

少年金次郎は開拓日系移民の心のよりどころにもなっていました。2008年6月、当時の松沢成文神奈川県知事が、日本人ブラジル移住100年記念でブラジルを訪問した時、サンパウロ市の神奈川県人会から金次郎像の寄贈の要請を受け、帰国後直ちに「二宮金次郎像、ブラジルに渡る実

行委員会」を発足させます。金次郎像は報徳二宮神社から寄贈を受け、輸送と諸々の諸費用は募金活動により、11月28日に尊徳生家前で200名の人々に祝福されて出発。翌年1月24日、現地で移民金次郎として再生しました。この像は横浜市金沢区白梅幼稚園に、創立者小田原出身の小泉金助氏が小田原の石屋高助から購入、設置したものです。1996年廃園時に報徳二宮神社が寄贈を受け、報徳少年使節としてめでたく蘇りました。



幼稚園児たちの「手本は二宮金次郎」の歌に送られてフラジールへの出発式

### ハンサム金次郎シリーズ ② 学校デビュー負薪読書の金次郎(表紙右上)

小田原報徳二宮神社本殿前に立つ金次郎の銅像は、小中学校の校庭に登場した負薪読書金次郎像の第1号です。奉納者は神戸の県会議員で青少年の指導にも熱心だった中村直吉氏です。社会に役立ててほしいと夫人が積み立てた貯蓄をもとに、昭和3年の天皇即位を記念して、負薪読書の14歳の金次郎像83体を発注し、夫妻の出身地である神戸、明石と生誕地小田原市栢山の小学校に寄贈しました。制作者は大阪市在住の鋳金家三代目の慶寺丹長氏で、当時のメートル法採用を記念して像高1メートルとしました。

しかし残念なことに、戦時中の金属回収令により金次郎像はすべて供出され、校庭から姿を消してしまいました。残ったのは「これはご神体同然である」として、草山惇三宮司が提供を拒んだ、神社像一体のみとされてきました。ところが近年、東京府中市の明星学苑中学に、昭和5年に中村氏が別途寄贈した84体目があることが同学園から報告されました。奇しくも最初と最後の2体のみが、無事に引き継がれてきたことになります。

発行 公益財団法人報徳福運社  
**報 徳 博 物 館**

〒250-0013 小田原市南町1-5-72  
電話0465(23)1151・振替00230-6-49044